

異世界バトルプロット

「ある騎士の成長」

「たあーっ！」

可愛らしいかけ声と共に、木剣を振るう少年がいた。

七、八歳くらいだろうか。少年は汗まみれになりながら突っ込んでいく。

年齢からは考えられない鋭い一振り、しかし対峙していた初老の執事はそれを軽く弾き返す。

「わっ！」

木剣と共に吹っ飛ばされた少年は地面に尻餅を付く。

執事はふむと頷くと、少年に手を差し伸べた。

「まだまだですね。坊っちゃん」

「……強いな。爺は」

「これでも昔は騎士団長を務めておりましたからな」

にっこり笑って少年の手を握って、立ち上がらせる。

「坊っちゃんこそ、齢にしては素晴らしい才能です。あと十年もすれば剣にも重さが乗り、私も叶わなくなるでしょう」

「俺は今勝ちたいんだよ！」

執事はしばし考え込み、その問いに答える。

「小手先の技術に頼るよりも、まずは一撃に全力を込めるのを意識なさい。さすれば十年も経つ頃にはきっと、と言ったところでしょうか」

「って、それでも十年かかるのかよっ！」

「ははは、剣とは厳しい世界なのです。振るった剣の数、重ねた年月こそ全てなのです。……さて休憩も終わったし、訓練を再開すると致しますかな」

「次は絶対勝つ！」

再び剣を交える二人。

そんな厳しくも優しい日々は過ぎていき一十年の月日が経った。

◇

ードドドド、地鳴りが辺りに響き渡る。

迫り来るのは魔物の群れだ。大群だ。

街を守るべく騎士団が並ぶが、その数の多さに皆が浮き足立っている。

兵たちの弱気な声が口々に漏れ、広がっていく。

そんな中、

「狼狽えるでないッ！」

老騎士の怒声が飛ぶ。

そしてゆっくりとした口調で、言葉を続ける。

「……大丈夫だ。あの方がいる」

老騎士が向ける視線の先一騎士団の戦闘に立つ一人の騎士。

その手には他者の者より明らかに大きな剣が握られていた。

ゆるりと、構えた大剣が『何もない場所』に振り下ろされる。

途端、巻き起こる巨大な地震。

魔物の地均しよりも遥かに大きなそれに、魔物たちは思わず動きを止める。

そしてーバキバキバキィ！ 鈍い音と共に地面が割れていく。

「ギャアアアア！」

だが魔物たちもそれで大人しく落ちていくようなタマではない。

落ちていく仲間の背に乗り、足場にしながら、亀裂を越えていく。

ーそれこそ、騎士の思う壺だということなど思いもよらずに。

力強い為から繰り出される渾身の横薙ぎが、空中を跳ねていた魔物たちを一刀の元に切り伏せた。

バラバラと落ちていく魔物の群れを前に残心する騎士。

その隙のない佇まいから、更なる一撃を準備してのものだった。

「全てを込めた一撃……それを、更に連打するとは……私の想像の遥か上に行く成長をなさいましたな。坊っちゃん」

老騎士はそう呟いて、兵たちに声を荒らげる。

「今だ！ 敵の大半は我が主人が倒したぞ！ 貴様らも働く時ぞ！」

「おおおおおおおおおおおっ！」

総崩れになった魔物たちを蹂躪していく騎士たち。

その戦いを機に、騎士の名は大陸中に知れ渡っていくのだった。